

TOEIC Bridge テスト結果

——英語の授業における TOEIC に対する取り組み——

中島 直樹

1. はじめに

平成14年7月と翌15年1月の2度にわたり、城西大学女子短期大学部において TOEIC Bridge テストが実施され、1年生のほとんどが受験した。本学では数年前より入学時の4月に英語力調査を行い、その調査結果を基にして一年次の英語の必修科目であるプラクティカル・イングリッシュとカレント・イングリッシュを能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図ってきたが、クラス分けをされてそれぞれのクラスで前期・後期の授業を終えた後の7月末と翌年の1月末に、ひとりひとりの学生がどの程度英語力が伸びたかを見るために今年度初めて TOEIC Bridge テストを実施した。また、7月の試験結果を基にして後期のクラスを編成しなおし、学生がより適切なレベルのクラスで授業を受けられるよう配慮し、授業の成績と TOEIC Bridge の成績を総合して評価することにもなった。

本論は、本年度の英語の授業における TOEIC Bridge に対する取り組みに加えて、本学学生の英語力調査を参考にしながら、1回目の結果と2回目の結果を比較することにより、どのような勉強をして、どういった学生生活を送った学生が、どれだけスコアが伸びたかということを後日実施した学生との個別のインタビューを参考にしながら調査したものである。

2. TOEIC Bridge テストの特徴

TOEIC は約50ヵ国で実施されている世界共通の国際コミュニケーション英語能力テストであり、評価は10点から990点までのトータルスコアとリスニン

グ、リーディングのセクションスコア（各5点～495点）で示され、その評価基準は毎回のテストによって変化することなく常に一定であるとされている。企業では新入社員のレベルチェック、英語研修事前・事後の効果測定、海外出張・駐在基準、昇進・昇格基準など、大学・短大では学生の就職支援、単位認定、推薦入試などに活用されている。

TOEIC Bridge はその TOEIC への掛け橋という意味を込めて、基礎的な英語コミュニケーション能力を測定する世界共通のテストとして開発された。TOEIC スコア 450 点以下の初・中級レベルの英語能力を評価するテストであり、結果は合格・不合格ではなく、リスニング、リーディング（各10点～90点）とトータルスコア（各20点～180点）、および5分野3段階のサブ・スコアで表される。テスト問題数と時間は TOEIC の半分に設定（1時間・100問、リスニング25分間50問、リーディング35分間50問）されていて、TOEIC よりも平易で身近なコミュニケーション場面や素材をテスト問題に採用している。リスニングセクションの出題スピードは TOEIC より遅く、ネイティブスピーカーが注意深く話す際のスピードと同じである。TOEIC よりも易しく、日常的で身近な問題を扱っていて、時間も短く、基礎的レベルの英語能力測定に照準を合わせて設計されたテストであるので、本学の学生にとってはこちらの方が向いていると思われる。

3. 授業における TOEIC (TOEIC Bridge) に 対する取り組み

今述べた通り、今年度も4月に英語力調査を実施し、経営情報実務学科においては基礎力のあるクラスから順にA, B1, B2, B3, Cに、現代文化学科においても同様にA, Bに分け、能力別クラス編成で授業を行い、教育的効果を上げられた。TOEIC Bridge のスコアアップという具体的な目標を設定したため学生の勉学意欲も高まった。プラクティカル・イングリッシュ、カレント・イングリッシュ共に TOEIC 問題を扱っているものを教科書として使用した。通常の授業に加えて、今年度はマルチメディア教材を活用した授業を試験的に導入したが、学生の反響はこちらが思っていた以上に大きかった。以下に実際に使用した教材（すべてCD-ROM）について説明する。

- ・ TOEIC テストパーフェクト入門

リスニング強化プログラム、リーディング強化プログラム、語彙・イディオム増強プログラム、これだけは知っておきたい文法事項32の4つのプログラムから成り、非常に使いやすく、レベルも本学学生に合っているので主にこれを用いた。ナチュラルスピードと速聴の2つが用意されているが、前者で十分に TOEIC に対応できる。

- ・ TOEIC テストスーパー模試 600 問

パーフェクト入門では少し物足りない学生が使用した。実際の TOEIC テストとまったく同じ形式で学習できる。リスニングスピードは少々速いが、解答を選ぶとトランスクリプションと質問の英文とそれらの全訳が表示され実に便利である。解答・解説も丁寧で分かりやすい。

- ・ TOEIC 実践模試テスト

スーパー模試 600 問とほぼ同じ形式・レベルであるが、その都度間違えた問題のチェックができないところが不便であった。出題問題の質はかなり良い。自宅学習用に貸し出すことが多かった。

- ・ Viva! San Francisco

旅行編と留学編の2部で構成されている。プロのスタッフが現地ロケを敢行して撮影しており、開放感と美しさに溢れたサンフランシスコを満喫しながら楽しく英語が学べる。本学の LL 教室では残念ながら使用できなかったのも、これも希望の学生に貸し出した。

- ・ Oxford Interactive Word Magic

絵本を読んでいる感覚で英語が学習できるので、英語に対して拒絶反応を示してしまう学生に主に用いたところ、ほとんどの学生が目を輝かせながら取り組んでいた。この教材にはできない学生を引き付ける魅力があると思う。

・Power Words (Level 1～4)

英語の基礎をなす必須単語から読解の基礎を固める英単語までを無理なく学習できる。かわいいキャラクターと楽しいゲームが用意されているので、これも英語に自信のない学生に人気であった。

4. TOEIC Bridge テスト結果

本年度の TOEIC Bridge テストの結果は次の表の通りである。平均点の後ろの L はリスニングセクション、R はリーディングセクションであり、それぞれ 90 点満点、全体で 180 点満点のテストである。上の表が第 1 回目のテスト結果、下の表が第 2 回目のテスト結果である。

学 科	受験者数	平均点 (L)	平均点 (R)	総合平均点
経営情報実務	64名	52.2点	48.8点	101.1点
現代文化	26名	51.7点	49.8点	101.6点
全 体	90名	52.1点	49.1点	101.2点

第 1 回 TOEIC Bridge テスト結果 (平成14年 7 月に実施)

学 科	受験者数	平均点 (L)	平均点 (R)	総合平均点
経営情報実務	58名	55.0点	53.4点	108.5点
現代文化	18名	59.5点	55.2点	114.7点
全 体	76名	56.1点	53.8点	110.0点

第 2 回 TOEIC Bridge テスト結果 (平成15年 1 月に実施)

第 1 回目と第 2 回目を比較してみると、すべてのセクションで成績が上がっていることが分かる。学科別に見ると、経営情報実務学科においては 7.4 点、現代文化学科においては 13.1 点、総合平均点が上昇している。アップ率にしてみると、経営情報実務学科で 7 %、現代文化学科で 13% となった。特に現代文化学科の学生の成績上昇が著しかった。クラスに応じてそれぞれの英語担当

教員が必要な文法・語法を基礎から教え込み、リスニングテープを聞かせ、マルチメディア教材を活用した授業を熱心に行った結果であり、今回のこの成績についてはかなり満足してよいのではないかと思う。

5. B1, Cクラスの結果及び学生の声

ここでは今年度筆者が実際に担当した経営情報実務学科のB1クラスとCクラスの学生の中から特に成績の上昇が著しかった者のスコアと個別のインタビューを通して得られた学生の生の声を紹介したいと思う。

まず、Cクラスから見ていくことにする。Aさんは、入学時に行われた英語力調査では26点と最低レベルであったが、TOEIC Bridge 第1回目が76点、第2回目が100点であり、24点上昇した。1年生全体で3位の32%のアップ率であり、短大の1年間の勉強でBクラスの上位層とほぼ肩を並べてしまった。彼女は1時限目の授業にもかかわらず年間を通して無遅刻無欠席であった。授業に対しても非常に熱心に取り組んでいた。ちなみにアップ率1位と2位は現代文化学科の学生で、それぞれ38%、37%であった。

同様に、Bさんも英語力調査では30点と基礎力が不足していたが、第1回目で82点、第2回目で108点と着実に力をつけた。同じく32%のアップ率であった。彼女は女子ソフトボール部の練習と短大の授業とを見事に両立させている。

また、Cさんは英語力調査では26点と下から2番目の成績で、授業を担当してみても他の学生以上に基礎学力に不安を感じていたが、第1回目82点、第2回目108点と何とかここまで引き上げることができた。1年間、真面目に努力した結果だと思う。22%のアップ率であった。

次に、B1クラスを見てみる。Dさんは英語力調査では68点と当初よりかなり基礎力があつた。第1回目が106点、第2回目が120点であり、順調に成績を伸ばした。彼女はCD-ROMを使った学習は、聞き取れなかった英文を瞬時に繰り返し何度でも聴けるのでとても耳の訓練になったということを言っていた。自宅のパソコンに授業中に使用できなかった様々なマルチメディア教材をインストールして今でも学習を継続しているようである。

坂戸出身のEさんは、英語力調査72点、第1回目88点、第2回目110点、

25%のアップ率であった。もう少し伸びるだろうと思っていたが、家ではあまり勉強していなかったようである。

Fさんは英語力調査72点、第1回目92点、第2回目102点と大きな伸びは見られなかったが、Oxford Interactive Word Magicの絵やイラストを使って英語を覚えるやり方が効果的だったと言っていた。

Gさんは英語力調査66点、第1回目96点、第2回目112点、アップ率17%であり、安定した成績を残した。授業でリスニング対策用に何度もテープを聞いたことで英語の速さに慣れることができたと言っていた。

Hさんも英語力調査72点、第1回目100点、第2回目116点、アップ率16%と安定した成績を残した。彼女もOxford Interactive Word Magicを気に入っていたようである。短大の英語の授業で覚えた何気ないフレーズが口をついて出てくるようになったのが嬉しいと言って喜んでいた。

Iさんは入学当初より英語に非常に興味を持っていて、夏休み中にUCRのサマーセミナーに参加して貴重な体験をした。英語力調査では70点と初めからかなり基礎力があつた。第1回目が98点、第2回目が120点であり、順調に成績を伸ばした。毎時間テープを聞いたこととCD-ROMで楽しく勉強できたことがよかったと言っていた。

Jさんも英語力調査64点、第1回目100点、第2回目112点、アップ率12%であり、安定した成績を残した。プラクティカル・イングリッシュとカレント・イングリッシュでそれぞれリスニングの勉強と文法・語法の勉強ができてよかったようである。

ほとんどの学生が成績を上げており、英語の授業に対しては好意的な評価が多かった。マルチメディア教材を活用した授業については、大多数の学生が楽しく勉強できて有益であったと回答していた。

6. おわりに

TOEIC Bridge テストを2度共受験した本学短大1年生76名の内62名のスコアが上がっていた。現代文化学科においては、スコアが下がった学生はひとりもいなかった。このことは大きな喜びであろう。たとえどんなに基礎力のな

い学生でも毎時間テープを聞かせ、丁寧に解説をすればリスニング力は伸びるし、文法・語法を教え込み、それぞれのクラスのレベルに合った説明のしかたをすればリーディングの点も上がる。今回のこの結果は今後教える側の励みにもなると思う。

今年度は、能力別クラス編成で授業を行い、TOEIC Bridge テストのスコアを基にして後期にクラス替えを行ったことが学生にとって良い刺激になったと思う。またマルチメディア教材を活用した授業を試験的に導入したが、学生の反響はかなり大きく、ほとんどの学生が興味を持って熱心に取り組み、力をつけていた。使い方によっては、英語に対して拒絶反応を示していた学生をも引き付ける可能性があるので、これは来年度の大きな検討課題としたい。